

When I first arrived here we were a very small company. In fact, in our office we had 28 people total and I believe there were five American staff that were ahead of me that came in. So, we were just starting to grow.

私が最初ここに来たときは、ここはとても小さな会社だったんです。実際、うちのオフィスは社員が全部で28名で、たしか5人のアメリカ人スタッフが私より先に入社していました。ですから、まさに成長のスタートを切ったばかりだったんです。

In fact, 実際

口ジック

「実際」という意味ですが、この聞き取りでは、具体例を挙げて説明(サポート)するときの「旗印」表現としてしっかりと押さえてくださいね。「最初来たとき、とても小さい会社だった」というメインポイントに対して、In fact の後ろで「実際こんな様子だったんです」と具体的に描いてくれています。

We hadいました

やまと言葉

「～人いた」と言いたいとき、もちろん there was (were) ... も使えますが、このように動詞 have で言うのもとても自然な言い方です。ちなみに、「いる」、「ある」と言いたいとき、全て動詞 have を使って言うことができますので、スピーキングのときに動詞 have は非常に便利です。

We have three buildings here. ここには、建物が**三棟ある**

We have Fall Festival here every year. 毎年、ここで**秋祭りがある**

We still have thirty minutes. あと**30分ある**

We have ten participants. 参加者が**10人いる**

We have Mr. Yamada here today. 今日は山田さんが**いらしています**

Do we have any doctor here? お医者さんは**いらっしゃいますか**

... were ahead of me 私より先だった

慣用表現

ahead は「前方にある」というのがコアの意味です。場所、時間、順位などに関して広く使われますが、ここは後ろから、that came in 「入社してきた」と具体的に定義(説明)してくれていることから、「入社時期が私よりも先だった」ことを意味していることが分かります。

to come in 入社する

慣用表現

会社や職場について話している場合、to come in で「入社する」という意味になります。

There were five American staff that were ahead of me that came in.

5人のアメリカ人スタッフが私より前に入社していた

パターン構文

「名詞(five American staff) + 修飾節」の文のつくりですね。しかも、ここは five American staff に、まず that were ahead of me の修飾節がついて、さらにもうひとつ修飾節 that came in が足されたことで長くなっています。このような文を英文解釈的に文末から戻って理解しようとすると途中で迷子になってしまいます。後ろからどんどんと情報が足されてきても、構文を見失うことなく正確に意味を処理していく力を強化するために、[結論 詳しい情報 詳しい情報] (結 詳 詳) で情報が足されてくる「英文のつくりの特徴」を自分の中に作りこみましょう。次のような意識で練習することで、「英文のつくりの特徴」を味わい、体に叩き込みます。

There were five American staff (5人アメリカ人スタッフがいたんですよ...ってどんなスタッフ?)

...that were ahead of me (私より前だった...って具体的には?)

...that came in (入社した人たちね...なるほどそういう人たちね)

We were just starting to grow 成長のスタートをきったばかりだった

やまと言葉

ここは、were starting ... と過去進行形になっています。「あることに向かってレールが既に敷かれていて、そのレールの上に乗って、その方向に向かって進んでいる」というのが「進行形」の感じですから、ここは、were starting to grow で「成長する方向に向かって進み始めた」という意味になります。さらには、just が入ることで「成長する方向に向かって進み始めた“ばかり”」、「成長のスタートを切った”ばかり”」のニュアンスが加わっています。

What is typical for a woman of my generation, I have a job history rather than a career,

私の世代の女性には典型的なことなのですが、私は、キャリアというよりは職歴を積んできたと言えます。

What is... ...なことなのですが

パターン表現 what is typical for a woman of my generation 全体で大きな名詞のかたまりです。名詞のかたまりをボンと置いて、前置きの使います。What is typical of ... で、「～としては典型的なことなのですが...」、「～としてはごく一般的なのですが...」、「～らしいことなのですが」のような意味になります。

What is typical of career politicians, ... 政治家には典型的なことですが、

What is very typical of my mother, ... いかにも私の母らしいのですが、

a job history 職歴

やまと言葉 「仕事の歴史」という意味ですが、次の to have a career が、ひとつの専門分野で、経験と専門性を積み重ねていく経歴であることに対比して、to have a job history は、「どういう職についてきたか」という「職歴」という意味で使っています。

to have a career キャリア

慣用表現 上記のように、「キャリア」は発展的に経験や専門性を積み上げていくプロセスを含む概念なので、to have a career は感覚としては「キャリアを積んでいく」といった感覚ですね。to have a good career で、「いいキャリアを積んでいく」といった感覚です。

... rather than ~ ~というよりは...

パターン構文 (A) rather than (B) で「(B) というよりは (A) 」という意味ですが、このような文を、英文解釈的に後ろから戻ってきて理解しようとすると聞き取りで負荷が高くなります。文頭からすっきりと理解するよい手は、rather than 以下には「これじゃないよ」と打ち消される内容がきますので、rather than ... と聞こえてきたら「× (バツ!)」と頭に浮かべ、(で、今から言うやつじゃないんだね、これじゃない、これじゃない!)と意識しながら rather than 以下を聞き進むと、意味がずっと入ってきやすくなります。

because when I was growing up, the only positions which were really open for women, at least in my culture, were that of secretary, and nurse, and cook. And they really were not professional positions.

というのも、私が育った頃は、女性にとって本当に開かれていた仕事というのは、少なくとも私の生まれ育った文化では、秘書や、看護婦や、コックといった仕事で、しかも、そういった仕事も本当のところ、専門職的な仕事というのではなかったんです。

the only positions which were really open for women 女性に本当に開かれていた仕事

パターン表現 the only position which were really open ... は「名詞 + 修飾節」の文のつくりですね。これで「ひとかたまり!」の感覚を味わい、ひとまとまりで意味をとらえられるように慣れておきましょう。ここでは特に、「the only 名詞 + 修飾節」というよく出てくるパターンに慣れてしまいましょう。

The only thing (that) I can think of is... 唯一思いつくのは、

The only choice (that) we have is... 唯一の選択肢は、

The only reason (that) I did that was... 私がそうした唯一の理由は、

that of secretary... 秘書の仕事

文法 that は a position を指します。

professional positions

やまと言葉 高い専門性、知識、経験、訓練などが要求される職のこと

I like the personal freedoms that we have today.

今日私たちが手にしている個人の自由というものが、私はいいと思いますね。

I like ... いいと思う

やまと言葉 like を使って「～が好きだ」のように「好み」を言うことで、自分がそれに対して「賛同していること」、「プラスの評価をしていること」を示す言い方がよくされます。これに続くサポート部分の I like the fact that ... も同じ意味合いです。

I really liked your report. 「君のレポート、よかったよ」

the personal freedoms that we have today 今日私たちが手にしている個人の自由

パターン表現 「名詞(the personal freedoms) + 修飾節」というつくりですね。we have today 「私たちが今日手にしている」は、コンテキストから分かるので、日本語ならば敢えて言う必要のないように思える情報ですが、英語ではこのように、日本語では敢えて言う必要のないような詳しい情報が、後ろから足されてくることに慣れておきましょう。the personal freedoms のように名詞だけがポン！と来たら、「あ、後ろから詳しく説明してくれるかもしれないぞ」という意識を持ち、「名詞 + 修飾節」でひとかたまりの感覚で意味を処理できるようにしておく聞き取りが楽になります。

this problem that we are having (今直面している)この問題

the experience that we have (私達の持っている)経験

the strengths that we have (私達の持っている)強み

I like the fact that we're able to move about freely, to change careers if we want to, to change companies if we want to, and to really do all of the things that we want to do to be happy and to be successful and to feel like we're making a contribution.

自由に行き来ができること、望むなら仕事を変えられること、望むなら会社を変われる、ということがいいと思います。そして、要は、自分が幸せであるために、成功するために、そして何かの役に立っていると感じられるために、望むことは何でもできるということが、いいと思いますね。

to move about ... 動き回る、行き来する

慣用表現 直訳的には about で「辺りを」という感じなので、漠然と「動き回る」、「行き来する」という意味になります。

to change careers 仕事を変える

慣用表現 「ひとつのキャリアから別のキャリアへと変わる」という意味で、careers と複数形になります。すぐ後ろの to change companies が複数形なのも同様の理由です。

really ... 要は

やまと言葉 really は「本当に」という意味ですが、ここでは「要は」のように、自分が一生懸命説明していることをひとつの言い方でまとめるような感覚で使われています。really は、この「要に」の意味でもよく使われます。

all the things that we want to do やりたいことすべて、やりたいことは何でも

パターン表現 「やりたいことすべて、やりたいことは何でも」という、ひとつの大きな名詞のかたまりです。things+[修飾節] は非常によくあるパターンの表現で、ネイティブにとってはこれ全体で一単語のまとまりの感覚なんですね。私たちもその感覚でこのつくり慣れておく聞き取りが楽になります。特に、the things 「物事」に限らず、people 「人々」、someone 「誰か」のように漠然とした名詞だけが来たら、ほとんどの場合、後ろから修飾節で詳しく説明してくれる情報が足されてきますので、覚悟して待つ、ひとまとまりの感覚で聞き取るようにします。

to make a contribution 貢献する

慣用表現 to make a contribution は相性のよい「動詞 + 名詞」の組み合わせで、セットでよく使われる言い方です。「貢献する」という意味です。

やまと言葉 to contribute は「ある場に対して、自分の持てるものをプラスとして出す」というのがコアの意味です。「会議」が「場」であれば、「よい意見や質問を出す」という意味になりますし、「場」が「基金」であれば、「寄付をする」の意味にもなります。
また、to contribute というのは、アメリカの価値観の中でキーワードとなる大切な概念で、「contribute できる人」であることは、本人のやる気、自信、自尊心にとっても非常に重要です。さらに、人として「あるべき姿」であるという意識が強くなります。

to be happy and to be successful and to feel like we're making a contribution

やまと言葉 「説得のためには、サポートは3つ置くのが効果的とされている」とテキスト p.37 でも触れました。ここは「to - (～のために)」で、「目指していること」を具体的に挙げている箇所ですが、やはり3つ言ってくれていますね。to... and to ... と言われ始めたら、「あ、これは3つくらい来る可能性があるぞ」と先読みする感覚があることで、文が長くなってきても途中で迷子になりにくく、また、意味も頭に残りやすくなります。

ちなみに、上述の to make a contribution 「貢献すること」に加え、to be happy 「幸せになること」、to be successful 「成功すること」というこの3つの要素は、アメリカ文化で人間のあり方の「美意識」として非常に重要だと考えられている価値観でもあります。